

特別講演

乳幼児の口腔機能の発達と不全



昭和大学歯学部スペシャルニーズ口腔医学講座口腔衛生学部門

教授 弘中 祥司

略歴

職歴

1994年 北海道大学歯学部卒業
1994-2001年 北海道大学歯学部小児歯科学講座 医員～助手
2001-2012年 昭和大学歯学部口腔衛生学教室 助手～講師
2013年 昭和大学歯学部スペシャルニーズ口腔医学講座口腔衛生学部門 教授
昭和大学口腔ケアセンター長（兼務）スペシャルニーズ歯科センター長（兼務）

役職

国際障害者歯科学会(iADH) 前理事長
日本歯科医学会 理事
日本障害者歯科学会 理事長
アジア障害者歯科学会(AADOH)前理事長
日本摂食嚥下リハビリテーション学会 理事
国際嚥下学会(WDS) 代議員
日本小児歯科学会 理事
日本老年歯科医学会 理事
日本歯科医学教育学会 代議員
日本口腔衛生学会 代議員
東京オーラルマネージメント研究会 代表
JOINT 4 代表
つばめの会 顧問

著書：摂食嚥下リハビリテーション中心に約60冊

食べる飲み込む機能は、生後に学習して獲得する機能であり、プログラミングされた機能ではありません。母親の胎内で学習した哺乳の動きは、生後、授乳期～離乳期～自食期へと、食行動（自発的行動・遊び）と食環境（養育者・場所）の相互作用によって学習される機能です。したがって、食べる機能は「食べること」によってより効率よく習熟されます。ところが、食べる機能の発達および歯の発育には個人差が大きく、その学習過程において、「なかなか飲み込まない」とか「噛まない」という訴えは幼児期において、比較的多い訴えの一つです。実際に、このような幼児期の食行動を診る場合には、本当に「できない」のか、それとも出来るけど「しない」のかを見分けて対応していく必要があります。この点が、子どもの食支援で最も面白い部分です。

また、摂食嚥下機能は、出生後からすぐに生育環境・食環境や口腔の感覚－運動体験をとおして、新たな機能を獲得しながら発達する運動機能でもあります。したがって、摂食嚥下機能の発達は、感覚刺激（主として触圧覚）に対して引き出される種々の運動・動作を食べる目的に合った動作（機能）に統合させることで営まれる随意運動です。摂食嚥下機能に関わる機能の多くは、乳幼児期に獲得されますが、成長が著しい時期であり、形態的な成長変化とともに正常な機能発達がなされますが、反対にその学習時期に負の因子が加わる事によって、小児期の食事のトラブルは発生します。

近年は、食支援や「食育」という言葉は耳にする事がが多いのですが、歯科医療関係者の関わりがいまひとつ理解しにくいと思われている方も多いと思います。現在、口腔機能発達不全症という新病名を日本歯科医師会・日本歯科医学会が作成しており、これから歯科医療に新たな考え方が浸透されております。今回は、私たちの教室で取組んでいる研究・臨床を通じて、支援の在り方を皆様と考えたいと思います。